OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「二」の夢想 : ハイデガーのトラークル論を脱構築するデリダと、デリダを再構築するクレルの余白に
Author(s)	須藤, 訓任
Citation	メタフュシカ. 2019, 50, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73763
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「二」の夢想――ハイデガーのトラ―クル論を脱構築するデリダと、デリダを再構築するクレルの余白に

須藤訓任

「散逸」と「分散」

> 「現存在の世界内存在は、その厳然たる事実性によってそのつどすでに、内存在の特定の仕方のうちへと散逸されたり、それどころか、断片化されたりしている。」（Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen, zwölfte Auflage, 1972, S.56）

ハイデガーは『存在と時間』第 1 篇第 2 章「現存在の根本体制としての世界内存在一般」第 12 節のなかで、このように述べている。これを承けてデリダは、『存在と時間』刊行から一年後の講義「論理学の形而上学的始原諸根拠」での呼称（Heidegger Gesamtausgabe Bd.26, S.174）に倣って「散逸 Zerstreuung」をわざわざ「超越論的散逸 dispersion transcendentale」と呼び、それは「中立性における現存在の本質に属する」（Jacques Derrida:Geschlecht la différence sexuelle, la différence ontologique（1983）, in: *Psyché*, Galilée, 1987, p.409）と述べる。（「現存在の中立性 Neutralität」との文言も同講義に登場する。Heidegger op. cit., S.172）たしかに「散逸」なる語は、今の引用や「交渉はすでに、多様な仕方の配慮へと散逸されている 」（同篇第 3 章第 15 節 S.67）に見られるように、いかにも、現存在の本来性・非本来性の対比関係からするなら、中立的と評されてよい記述において使用されている。だが、デリダが「超越論的」とか「中立」という形容にこだわるのは、散逸は『存在と時間』において非本来性の一特徴として使用される方がよほど多いからなのである。たとえば、第 1 篇第 4 章「日常的自己存在とひと」のなかの一節。「日常的現存在の自己は**＜ひと＞という自己** das Man-selbst であり、これをわれわれは、本来的自己、すなわち、固有のものとして掴み取られた自己と区別する。＜ひと＞という自己としてそのつどの現存在は＜ひと＞のうちへ散逸されており、まずもって自分自身を見つけ出さねばならない。この散逸が、身近に出会われる世界のうちで配慮しながら没頭することとして知られるあり方の「主体」を特徴づけるのである。」（S.129）

この文面が現存在の非本来性を言い当てたものであることは明らかだろう。だが「散逸」の使用はそれだけでない。用例は少ないが、本来性の記述のために用いられることすらないわけではない（S.273、310 など）。そうである以上は、「散逸」とは本来性と非本来性の対比関係のみならず、中立的事態の記述のためにも用いられるのである限り、ある種の汎用性を備えた語であって、したがって、中立性とは言っても、今の場合、本来性および非本来性と区別された第三の中間領域というよりは、本来性・非本来性および中間性という全領域をカヴァーする意味での中立性なのであって、その含意をいっそう際立たせ哲学的に理論武装するために、同語が「超越論的」という規定によって代替されても、決しておかしいことにはなるまい。

しかし、「中立性」を「超越論的」で換言することは、上掲の講義でのハイデガーの示唆に従ったことであるにせよ、果たして適切なことなのだろうか。むしろ、中立性がメタ的上位規定であり、そういうものとして本来性および非本来性から峻別されて「超越論的」と形容されるというのなら、本来性・非本来性には同じ形容はそのままでは適用されない可能性が高くなるだろう。つまり、本来性と非本来性に関する（現象学的）記述は、超越論的ならぬ記述、その意味で「存在論的」ではなく「存在的」な記述になってしまいかねない。しかるに、『存在と時間』の基礎的存在論は――「超越論的」と称するなら――全体として「超越論的」と性格づけられるべきであって、そのうちの「中立的」――ハイデガー自身の別の用語を援用するなら、「無差別的な」――記述だけが超越論的で、本来性や非本来性に関する分析は超越論から除外されるということはありえない。除外不可能と判定されるなら、中立的現存在における散逸の超越論性とは一体いかなることになるのだろうか。この場合、散逸の超越論性ないし超越論的散逸ということがなにかしら堅持可能であるとしたら、それはどのようにしてか。

デイヴィド・F・クレルの書『他者の幻影たち』（David Farrell Krell: *Phantoms of the other Four Generations of Derrida's Geschlecht*, Sunny, 2015）の第 1 章（デリダの論文名を承けた）「ゲシュレヒト I：性差・存在論的差異」（の一部分）はこの問題に捧げられているといってよい。中立的・無差別的記述のみを超越論的と性格づけると、本来性・非本来性の「差別的」記述は超越論的ではないかのような誤解を惹き起こしかねないという難点を回避するためにまず考えられるのは、無差別的「散逸」のみを超越論的とするのではなく、それ以外の散逸をもそのうちに取り込みうるようにするために、新たな用語を導入して諸事象を再整理することであろう。その語を例えば「分散 dissemination」と名付けるなら、厳密にメタ的で無差別的に「超越論的」であるのは、（超越論的）「分散」のみであって、この「分散」の傘下に差別的な二種類の超越論的「散逸」が（さらに、本来性・非本来性のどちらでもない第三の中間領域も認められるというのなら、その第三の「散逸」も）そこに収められるという寸法である。その場合、「分散」はその他の「散逸」よりも上位にあるとしても、超越論的という点では区別されない。クレルが追求したのは、そしてその追求によってデリダに対し（批判的に）側面援助を繰り出そうとしたのは、こうした戦術であった。この戦術を展開すべく、クレルは、今しがたの「分散」に相当するハイデガーのドイツ語を Streuung であると特定しようとする。たしかに、Zerstreuung が「散逸」であるとしたら Streuung を「分散」として解するのは、語同士の繋がりからしても、それ相応の説得力を持つだ

ろう。この説得力を堅固なものとするために、クレルは『存在と時間』に近い時期の――さきの「論理学」講義の次の――講義「哲学入門」（1928/29 年冬学期）――ただし、1996 年出版の同講義は上掲論文をはじめ 80 年代一連のハイデガー論を執筆していた頃のデリダによって論及されることはありえなかった――を引き合いに出す。さしあたり、現存在はモノや他人などとの多様な諸関係のうちに散逸しているが――

> 「この散逸はしかし決して、バラバラになる諸部分に現存在が解体されるということではない。まさに逆であって、この散 - 逸のうちでこそ現存在はそれ固有の根源的な全的統一性を有しまた獲得するのである。だからわれわれが第一に云うべきは、こうした諸関係への散逸ではなく、ある根源的な分散 eine ursprüngliche Streuung ということである。この分散がまずもって散 - 逸の可能性の条件となるのであって、それというのも、現存在はそのつど、これらの諸関係のどれかへと優先的に自己喪失するのだが、それはつねに、他の諸関係のうちでの実存を犠牲にしてのことなのである。」（Heidegger, Gesamtausgabe, Bd.27, S.333）

根源的「分散はまずもって、散 - 逸の可能性の条件である」というのだから、クレルの戦術はものの見事な成功を収めたかのように見える。だが、今の一文で「散逸」とは文脈上、非本来性の散逸の意味に理解しなければならず、そこには本来性並びに中立性における散逸は含まれていない。「分散」はその際、非本来的散逸及びのその他の現象をカヴァーする超越論的上位カテゴリーとして身分設定されている。この「その他の現象」が問題である。そこには本来的散逸や中間領域の散逸も――それもできうべくんば非本来的散逸を含めた三種類のみが――下位カテゴリーとして含まれることは何ら保証されない。三種類（のみ）がカヴァーされるなら、たしかにクレルが願う超越論的理論整備はより堅固なものとなるだろう。だが三種類のカヴァーは理論的にはどこからも導出されず、むしろ、クレルがそうはなから前提しているだけなのである。だから「分散」が三種類の散逸をカヴァーするのは理の当然となるが、しかしそれは広義の「散逸」、すなわち、本来性と非本来性（また中間領域）という諸様態に共通の散逸、言ってみれば、散逸一般となにか意味上異なるところがあるだろうか。異ならないとすると、分散が散逸の可能性の条件であるとは、一般的散逸は個々の散逸の「可能性の条件」であるとの謂いになり、それは自明にして無内容であるしかないだろう。両者の違いを浮き立たせようとしても、せいぜい「散逸」は「分散」の意味上の強勢型 the emphatic form（Krell, op.cit. p.40）であると、デリダとともに（Derrida, op. cit., p.407）その語義上の関係にもとづいて、常識的な確認にとどまるしかない。実際、デリダにしても、「分散」が「散逸」によってともすれば汚染されて腐敗せざるを得ず、したがって両者の厳密な区分は困難と判断したがゆえに、「分散」に援護射撃を直下に求めることは控えていたのであった（Derrida, ibid.）。（それに対し、「入門」講義の行論からするなら、「その他」には本来的散逸や中間的散逸が含まれていなくともよく、したがって「根源的分散」と散逸一般は区別され、とりあえずそれで問題が発生することはない。）

としたら、どういうことになるのだろうか。要するに、クレルの戦術は見込まれたようには機

能しなかったのであり、新たな区別の導入による超越論のいわば厳密化による、困難の突破は実現しなかったのである。したがって、デリダは（したがってクレルも）同じ困難に引き戻されることになる。それは、デリダの「散逸」理解によっては、中立的無差別的散逸（超越論的散逸）と、それ以外の差別的散逸（様態的散逸）とで、その超越論としてのレヴェルに、あってはならない高低差が生じてしまうという、困難であった。この困難な隘路はいかにしてくぐり抜けられうるのか。いや、そもそもデリダはなにゆえに、脱出不可能な隘路へとおびき寄せられ閉じ込められてしまったのであろうか。[1]

この問題は一見したところ、何らわかりにくいものではない。当該論文においてデリダは、上掲の 1928 年夏学期講義（マールブルク大学における最終講義）「ライプニッツに発する論理学の形而上学的始原諸根拠」（全集第 26 巻）においてハイデガーが現存在に性別はなく、性的に「中性」「中立的」である（Bd.26, S.172）と述べていることに着目し、その延長上で現存在の「中立性」――それも「身体性、したがって性性 Geschlechtheit への事実的散逸 die faktische Zerstreuung」（ibid. S.173）からの中立性――が俎上に載せられるというのが、経緯の発端である。しかしそれにしても、デリダは現存在の性的中立性やら超越論的散逸やらにことさらに注目を促すことによって、一体いかなることを狙っているのだろうか。それは男女雌雄の二項対立に還元されない性的関係をあぶり出すそうとしているのである。

> 「無 - 性的中立性とは脱性別化するどころか、反対に、性そのもの（中立性はこれをむしろ解放するのだ）に対してではなく、性的差異の徴、より厳密には**性的二元性**の徴に対して**存在論的**否定性を発揮するのである。「二」との対比関係においてのみ無性性 Geschlechtlosigkeit はあるのだ。無性性がそれとして規定されるのは、性ということで性的二項対立ないし分割が直下に了解される限りにおいてのことなのである。」（Derrida, p.402）

デリダはこのように述べたあと、「論理学」講義から次の文面を引用する。

> 「しかしこうした性の無いことは内容空虚なるものの無差別ではないし、無差別的で有るもの的な無の、その弱い否定性でもない。中立性における現存在は無差別的に誰でもなく誰でもある、というのではない。むしろそれは根源的な積極性〔肯定性〕ursprüngliche Positivität であり存在〔本質〕の威力 Mächtigkeit des Wesens である。」（Heidegger, Bd. 26, S.172,

---

[1] 『存在と時間』における「散逸」の分析について一言しておきたい。デリダとクレルはこの分析について不十分なところを看取し、それゆえに「超越論的」の形容を導入した。たしかに、同書の説明は舌足らずな点が拭い去れないにしても、超越論的「分散」と「散逸」の峻別よりも、ある意味でより一貫している。なまじ「分散」を持ち出さないだけに、現象としては「散逸」で一本化されやすいからである。それだけに様態的「差別的」諸散逸の区別をどう理解するかが問題として逆にクローズアップされるが、様態的差異は「先視」の種別として解釈するというアイディアによって、『存在と時間』の場合説明が切り抜けられる。すなわち、散逸の様態的区別とはあくまで、先視による差異であって、先持としては同じ散逸現象として規定されるのである。そこには「超越論的」レヴェルの質的高低差という着想が入り込む余裕は残されていない。（Norihide SUTO: Was heißt „Indifferenz“?, in: *Philosophia Osaka* No.12, 2017 参照）

酒井潔訳、創文社。デリダの理解に合わせて訳文一部改変）

この引用に即してデリダは「性的に中立」である現存在の、現存在としての「根源性」を結論づけ、これをもって、ハイデガーからの引用の最後にある「根源的肯定性」＝「存在の威力」に該当させる。（Derrida,p.403）それはまた、「性差以前の性」とか「二元性以前の性」と命名される（p.402）。したがって、性別への散逸ということを言うとしたら、それは「二」によって――「いまだ」もしくは「もはや」――封印されない性差・性別、その意味で多様な性への散逸、二元性という「弱い」否定性なしのさまざまな性への散逸であるだろう（p.414）。要するに、デリダは超越論的散逸の着想によって当の散逸とそれ以外の様態的散逸との間のレヴェルの質的差を抱え込まざるを得なくなったのだが、それはもとを正せば、その着想によって排他的二項対立関係としての性差ではない性関係の可能性を開拓するという目論見の達成過程で生じたことであった。このレヴェル差の難点をクリアするべく、「根源的分散」と「散逸」との区別を導入し、超越論の徹底化を試みて、先に指摘した隘路にいっそうあからさまに陥ったのがクレルであった。むろん、クレル自身に隘路の自覚はない。したがって、彼はデリダの議論の――自身の立場からする――いっそうの精緻化、その論理的整合性の追求に邁進することになる。そのことは「根源的分散」と、いわば経験的「散逸」とを完全に分断し、両者による事態の「刻印 coinage」をそれぞれ「第一回目」「第二回目」として区分けすること――しかもそれがハイデガー本人によって行われたと解釈すること――として表面化する。

> 「したがってまたしても、**二種類**の頽落と散逸が存在するように思われる、あるいはこう言ったほうが良ければ、ハイデガーの分析においては、頽落と散逸は**二度に**わたって記されているように思われる。第一に、現存在の一般構造として、それは全面的に本来的であるか、あるいは少なくとも様態的に中立の構造である。そして第二に、派生的に、非本来性の一様態である。デリダは、第一の刻印、すなわち、正しいか少なくとも中立的な刻印、力能ある刻印が、第二の刻印――メルヴィル言うところの、眉の上の悲しき母斑――を不可避にする導出の順序関係を探求しようとする。悲しき母斑が、ハイデガーの否定にも関わらず、ハイデガー自身「プラトン主義的」とか「キリスト教的」として嘲る伝統と少なくとも何かしらの関係を持っていることは、デリダにとって疑いないことである。」（Krell, op. cit., pp. 43f.）

ここでは本来性の散逸と中立的なそれとが融合されており、これはハイデガーのトラークル論を取りあげる次節ではデリダ本人のやり口にほかならないことが確認されるだろうが、今は措いておこう。重要なのは、二回に分断される「刻印」のうち一回目が根拠となって、二回目の出現が必然化される論理的「導出の順序関係 the order of implications」なるものであり、デリダがそれの探求に興味を寄せているとされていることである。しかるに、この順序関係はデリダの文面では、二元対立としての差異ではない、性的差異の思考へと通じてゆく「導出の順序関係 cet ordre des implications」（Derrida, p.414）とされているのであって、クレルの述べているところと

はいささかズレが生じている。実際デリダは、散逸の「刻印」（この語自身もデリダは当該論文段階では――あとからの注を除いて――使用していないようだ）に一回目二回目の区別を設けていないばかりか、現存在の性的中立性のみに厳密な意味の超越論的身分を付与することすら拒否しており、したがって事実上、この性的中立性と男女雌雄の性差は同一レヴェルに置かれることになっている。

> 「現存在の分析論において、二項対立的な性の徴からまず引き離されなければならない無性性と中立性とは、この性差と単純に対立していると思われたかもしれないが、その外見にもかかわらず、実際のところは同じ側に、つまりこの性差――二項対立的性差――の側に存しているのである。」（Derrida, p.403）

性的中立性は二項対立の性差と同レヴェルにあり、それとある意味で相争う位置にある、とデリダは言うのだ。しかし、前者がより上位に位置づけられている以上、中立性は性差と「単純に対立している」わけではない。「思われたかもしれない aurait pu …croire」との条件法はしたがって、実際は「単純に対立しているのでない」ことを意味する。だがそうであるとしても、性的中立性は厳密には、それ自身のみが超越論的身分を有して性差からいわばメタレヴェルに超出していて、自分以外の散逸を経験的個別的事例として傘下に収めるものではあってはならないのだ。超越論的というのなら、いまの文脈からして、中立性のみならず、二項対立をなすそれぞれの男女雌雄それぞれの性も同じ超越論的身分が認められるべきだし、逆に男女雌雄の両性が経験的であるとするのなら、中立的性もまた同じく経験的であるのでなければならない。さもなければ、性的中立性が男女雌雄の両性と「同じ側に」位置づけられようもない。

こうして本稿の最初で嗅ぎつけられたデリダの議論の論理的不整合が再確認される。一方で中立性には、そして中立性のみには、超越論的な特権的身分が認められながら、他方で、半ば暗々裏に中立性、すなわち無差別性もまた、差別的諸様態と同水準に位置してそれらと相争うと設定されざるを得ないのである。この論理的不整合に対し、超越論的理論構成をより醇化し徹底することによって応戦したのがクレルであったが、しかしこのクレルの戦術は、産湯とともに赤子を流してしまう体のものである。この戦術によって、中立性の超越論的身分と差別的諸相の経験的身分という風に、両者の身分に質的相違を認定して論理的難点をすり抜けようとするのだが、そのことによっては、中立的性は超越論的であるがゆえに、他の経験的性性と、いわば現実の次元で成立場所の占有をめぐって葛藤を惹き起こすことがなく、ために、デリダが夢見心地に展望する多様な性の新たな可能性を提示するものともなりえないからである。性的中立性が超越論的身分であるのなら、それは現行の二項対立的両性の在り方に対しても妥当しているのでなければならず、それゆえ、現実的に二項対立的性そのものと摩擦で軋むこともなく、したがって、場合によっては二項対立的両性を排除してそれに取って代わるということもありえないだろう。そこには性の新たな現実的可能性など出来しようがない。論理的にはより明快になったがゆえに逆に、デリダの解釈は自身のうちにひそめられていた不整合ないし不毛性を露骨に表出することになっ

てしまった。もしくは、超越論としての理論的一貫性の追求によって、多様な性の可能性という肝心要の論点を流産する危険性に曝け出されることになってしまった。

しかしむろん、デリダとしては、クレルの側面援助によるオウンゴールの危険性を察知することはなかった。この後も彼は、ハイデガー解釈を多様な性の新たな可能性の探究として追求し続けるだろう。この探求の頂点に立つのが、特殊な成立事情を背景に持つ論文「ゲシュレヒトⅢ」であり、また彼の一連のハイデガー論の白眉をなす『精神について』である。両者ともその重要部分がハイデガーのトラークル論を巡って展開されるだろう。しかもデリダはその際、クレルの超越論に、二回の刻印ないし打撃をあからさまに採用するという形で、にじり寄ってゆく。クレルはそのことを、「性差・存在論的差異」との副題を有していたデリダの第 1 のゲシュレヒト論を論じる最後で、デリダが既にこの論文で自分のいう「二回の刻印」をデリダ自身の思想と化していたかのように自分に引き付けながら、次のように述べている。この引用をもって本稿もまた、少々手間取ったが、本論への橋渡しとしたい。[2]

> 「…ハイデガーにとって散逸ないし分散は**二度**生じているように思われる、とデリダは記す。最初は、内存在の多様な可能性への、思うに中性的な分散として、それどころか断片化（*Zerstreuung*, *Zersplitterung*）としてであるが、その次には、日常性と非本来性という欠如的様態としてである。分散と散逸の二重の打撃は――むろん、変化した形、つまり、現存在の基礎存在論というよりは**詩作**とハイデガーの対話とむしろ関連する形でではあるが――〔デリダにおいて〕第三世代の「ゲシュレヒト」の中心テーマとなるだろう。」（Krell, p.46）

トラークルの打撃は二回であったのか？

デリダは 1980 年代一連のハイデガー論を発表してゆく。それ以前にもまたそれ以後にもハイデガー関連の論文が執筆されないわけではないのだが、80 年代のものはテーマ的にも互いに直接的関連が深く、まさに「一連の」と形容されてしかるべきものである。本数にして四、五本であり、その第 1 の論文が 1983 年初出の上掲「ゲシュレヒト　性差・存在論的差異」であり、続いては 1985 年 3 月の講演「ハイデガーの手（ゲシュレヒトⅡ）」である[3]。公刊の時系列からするなら次は 1987 年 3 月の講演「精神について　ハイデガーと問題」であり、これは同年中にこの

---

[2] 「二回（目）」というクレルの超越論的構成が、デリダのとくに第 3 のゲシュレヒト論からヒントを得て構想されたことも考えられないでない。実際同論文にはその構成に相当するアイディアが見られるからである。デリダから得たヒントをクレルは今度は、いまだその構想が明確に打ち出されていなかった第 1 のゲシュレヒト論に遡及的に読み込んだということかもしれない。しかるにクレルは同論文が公刊される以前からそこで論じられるテーマについてデリダと書簡をやり取りしていて、しかも「分散」と「散逸」の区別について言及していた旨報告している（Krell, op.cit.,p.37 n.8, p.38 n.9）。この区別が事実上超越論の「二回」の内実をなすのだから、その時点でデリダの方がクレルからインパクトを受け、それがのちのゲシュレヒト論で披露される「二回（目）」の思想として結実したことは大いに可能だろう。

[3] 両論文とも論文集 *Psyché　L'invetion de l'autre*（1987）所収であったが、現在同論文集は二分冊化し、いずれも第二分冊に入っている。藤本一勇訳『プシュケー　他なるものの発明』I, II（岩波書店、2014、2019）は増補二冊本（1998、2003）を底本としているが、基本訳語の選定などが異なるので、同訳を参照しつつ、一冊本を底本として拙訳とした。

題名で上梓された。第四は、1989 年 9 月の講演「ハイデガーの耳　フィロポレモロジー（ゲシュレヒトⅣ）」であり、現在は『友愛のポリティクス』（1994）に収められている。従来、「ゲシュレヒトⅢ」が欠けていたが、著者の死後十四年たって Jacques Derrida : *Geschlecht Ⅲ　Sexe, race, nation, humanité*（Seuil, 2018）としてようやく出版され、欠如状態は 2018 年秋に解消された。出版が遅れた事情の仔細にはここでは踏み入らない。同書は大きく分けて二部からならなるが、その最初の部分四〇頁余り（p.35-p.77）は「ハイデガーの手」が講演された時、関連資料というか、講演の続編的文章として、会場の一部の聴衆に配布されたものであるが、それは未定稿にして未完成であるとして、デリダ自身、聴衆に対しそれからの引用などは控えるよう求めていた。ほぼ 100 頁になんなんとする後半部（p.79-p.177）は、1984/85 年のデリダのセミネール「哲学の国籍とナショナリズムⅠ　他者の幻影 *Nationalité et nationalisme philosophiques I. Le Fantôme de l'autre* 」のためのノートから、デリダの指示に従い、内容的に前半部の後続となる部分を引き移したものである。クレルは同書の出版以前から同書にまつわる諸事情を知悉し、またデリダのセミネールの記録をもあらかじめ詳細に参照して、2015 年の時点で、デリダのゲシュレヒトをめぐる諸論考（「精神について」を含む）をテーマとした一書を発表した。それが上掲『他者の幻影たち』である。

本節では、前節からの問題系を引き継ぎ、80 年代の一連のハイデガー論のうち、「ゲシュレヒトⅢ」を主たるターゲットとしつつ、その傍らクレルの書にも言及してゆく。

問題は「（超越論的）二回（目）」、要するに「二」であった。クレルは、上掲書を記す段階、つまり、デリダの死後ほぼ十年経った段階で、ハイデガーの「ゲシュレヒト」を論ずるデリダにあって「二」が一大テーマとなることが分かり切っていた。その上で、1928 年の講義や『存在と時間』を主たる論議対象としていた第 1 ゲシュレヒト論のデリダとしては議論の明確な焦点を結ぶことのなかった「二」が、その時点ですでに潜在的には主たる論点をなしていたことを浮き彫りにしようとした。いまや確認すべきは、デリダがいかにして「二」を導入するか、である。ということは、ハイデガーにおける「二」の重要性を、ハイデガー自身の、半ば無意識的であれ「二」への問題意識を、どのようにしてデリダが発見し、読者に対して披露するのか、ということである。だが、この「二」の発見は当初「ゲシュレヒトⅢ」（1985 年頃執筆）において、ハイデガーの（二つあるうちの）第二のトラークル論「原詩のなかの言葉　トラークルの原詩の在所究明 Die Sprache im Gedicht Eine Erörterung von Georg Trakls Gedicht」（『言葉への途上 *Unterwegs zur Sprache*』所収。Gedicht は「原詩」と訳す。）の脱構築的読解として遂行される。

上に言及した「ゲシュレヒトⅢ」の前半部の終わり近くになってデリダはまず、「原詩のなかの言葉」の一段落全体の仏訳を引用し、適宜原語を織り交ぜ解説する。ここではドイツ語原語からの拙訳のみを、最初の二文を省略して挙げておこう。

> 「われわれの言葉は、ある打撃 Schlag によって刻印されこの打撃のうちに打ち放たれた verschlagen 人間どもを「ゲシュレヒト」と呼ぶ。この語は人類の意味での人間族を意味もすれば、諸種族・部族・家族などの意味でさまざまな族をも意味する。そしてこれらのすべて

は再度また wiederum 両性の二性へと刻印される。「腐敗した形態 verweste Gestalt」の人間のゲシュレヒトを詩人〔トラークル〕は「腐りゆく verwesend」ゲシュレヒト（186）と名付ける。それはおのれの本質のあり方から放り出され herausgesetzt、それゆえ「放っておかれて呆然とした entsetzt」（162）ゲシュレヒトである。」（丸括弧内はトラークルからの引用箇所。）（Heidegger, *Unterwegs zur Sprache*, Neske, fünfte Auflage 1975, S. 49f.）

デリダはそこで引用中の「再度また」に言及し、これをもって二度目の打撃を意味するものとし、それゆえここでは二回の打撃が云われていると、まずは示唆する。人類ないしさまざまな「族」へと刻印することが第一の打撃であり、それらの「族」をさらに男女両性へと分ける打撃が第二回目の打撃だというわけである。しかも第二回目の打撃は腐りゆくゲシュレヒトへの刻印として、「悪しき mauvais」打撃と形容づけられる。つまり、男女両性の刻印は悪しき打撃であり、それが第二の打撃――「悪しき」「第二の」打撃だというわけである。（Derrida, *Geschlecht Ⅲ* , p.72）こうした二回の、特に二回目の打撃の性格づけには、ハイデガーのテクストに即するなら、様々な問題が見て取られ、デリダもまたそのことに無自覚でない。

二回の打撃が掬い上げられてきたのは、ゲシュレヒトというドイツ語の多義性のハイデガーによる説明に仮託してのことである。ハイデガーのその説明は、語義解説として、ごくまっとうなものと評価して大過ない。というのも、Geschlecht が「打撃 Schlag」に由来するとは、独和辞典にも載せられているような、何ら変哲もない語源説明であり、したがって「打撃」なる語を用いて、ゲシュレヒトの多義的語義を解説するのはまったく正当なやり方と考えられるからである。だが、この正当性がいまの場合、大きな問題を孕むことになる。というのも、ゲシュレヒトの多義的語義の説明として正当であり、その語の基本的にどのような用例にも通用するというからには、とくにハイデガーの思想に独特の説明ではないことになるからである。ところが、いまハイデガーのトラークル解釈が俎上に載せられている以上、そしてそこでこそゲシュレヒトの多義性が問題となるのだとすれば、そこから引き出されてきた二回の打撃とは、トラークル特有、それもハイデガーから見たトラークルに固有という側面を何かしら有しているのでなければなるまい。さもなければ、二回の打撃がトラークル＝ハイデガーにあってことさらに注目されるべきいわれが見当たらないことになってしまう。しかるに、デリダはゲシュレヒトの語義の説明だけから、それもこの語のトラークルによる使用になんら言及することのない説明だけから、前段の要約によるなら、打撃の二回性をクローズアップしてきているように見える。そういうことなら、この二回性の思想はゲシュレヒトの語を母語使用するあらゆる人間に妥当することになり、そこにはトラークルの影は消えうせることになりかねない。それなのに、どうしてデリダは語「ゲシュレヒト」から打撃の二回性の導出を敢行したのか。

デリダは二回のうち二回目の打撃を、腐りゆくゲシュレヒトへのそれとして「悪しき」打撃とみなした。それは直接的には、デリダ自身認めることだが、ハイデガーからもトラークルからも由来している形容ではない。先の一段に続く段落の冒頭ハイデガーが「呪われた verflucht」というネガティヴな語義の語を使用しているところから第二の打撃の「悪さ」は根拠づけられるので

ある。この段落はデリダの論拠の理解のみならず、ハイデガーのトラークル解釈の一つの要ともなるところなので、やや長いが全文を引いておきたい。

> 「このゲシュレヒトは何によって打たれるのか、すなわち、何によって呪われるのであろうか。呪いとはギリシア語ではプレーゲーであり、われわれの語では「シュラーク（打撃）」である。腐りゆくゲシュレヒトの呪いとは、この古きゲシュレヒトが両ゲシュレヒトの不和のうちへとバラバラにたたき入れられていることに存する。この不和をよりどころとしながら両ゲシュレヒトの各々は、野獣のそれぞれ単独化され剥き出しにされた野生の放し飼いの蜂起に狙いをつけそのうちにつけ入っていこうとする。二性そのものが呪いなのではなく、不和がそうなのである。不和は盲目の野生の蜂起をよりどころとしてゲシュレヒトを二分裂のうちにもちきたり、そのようにして放し飼いになった単独化のうちへと打ち放つ。「頽落したゲシュレヒト」はこのように分裂し打ち壊され、もはや自力では正しい打撃への道を見出すことはできない。正しい打撃をそれが有することになるのはただ、次のようなゲシュレヒトのおかげなのである。すなわち、おのれの二性が不和のうちから離れていって、単衣なる双重という柔和のうちへあらかじめ彷徨よいゆくゲシュレヒト、つまり、「ある違和なるもの ein Fremdes」であり、そのようにして異郷の人 Fremdling に従いゆくゲシュレヒトである。」（Heidegger, op. cit. S.50）

この引用には「二」が絡む語が最低三語登場する。Zwietracht, das Zwiefache, Zwiefalt――Entzweiung「二分裂」も数え入れれば、四語――である。それぞれ「不和」「二性」「双重」と訳されたが、とても意を尽くせたものではない。三語は互いに関連付けられながら、他方で厳密に区別されてもいる。「不和」はまだしもわかりやすいように感じる。それは両性の二項対立的軋轢や敵対を指している。「二性」はネガティヴな意味合いもポジティヴな意味合いもさしあたり持たない、いわば「中立的」な二極構造を意味していると考えられる。それに対し「双重」は明らかに、ポジティヴな平和安寧のニュアンスを込められた、「二」をなす者たちの相対関係を示唆しているようである。問題はこの三種の「二」のうちどれが、デリダの云う「第二の打撃」にもっとも相当するのか、換言すれば、デリダはどれを一番の念頭に置いて「第二の打撃」ということを云い出したのか、である。

それは、これ以降のデリダの文脈を見ればはっきりしている。「不和」である。そのことに疑いはない。しかしそこで湧いてくるのは、はたしてこの、第二の打撃としての不和が、トラークル＝ハイデガーの文面に裏付けられうるのかどうか、という疑問である。ハイデガーからの最初の引用に従うなら、第二の打撃は「二性」を帰結する打撃であるべきであろう。そこでははっきり、「これらのすべては再度また両性の二性へと刻印される」と述べられているのだから。「再度また」と訳された wiederum は繰り返しとともに、以前の事柄に対する対比もニュアンスとしてもっており、したがって、繰り返された打撃はそれ以前の一回目の打撃と少々性格を異にしていることも含意している。この含意はいまの文脈にもよく合致するであろう。一回目とは、個々の

族への打ち付けによるその族のそれぞれ一個の族としての造型を意味するのに対し、二回目は両性という二個一的セットをなすという点で、対照的だからである。そればかりか、デリダは善悪の色彩がそれ自体としてはなにも伴わない一回目の打撃とは別に、二回目は「不和」を打ち出す打撃として「悪しき」打撃であるという点で、対照性・対比関係をより強烈に際立たせているとも考える。だが、そうすると、その打撃は「中立的」な「二性」のそれではないということになり、先に説明したこととは平仄が合わなくなる。

「不和」の打撃を第二の、それも「悪しき」打撃として位置づけるためには、どのようにすればよいのだろうか。それはむろん、第一の打撃をどのように定めるかの問題でもある。第一の打撃は先に見届けたところでは、さまざまな「族」を打ち出す打撃であって、それは個々の族をそれぞれ一個のそれとして打ち出す打撃であった。しかしそれが第一だとすると、それに続く第二は、いましがたも述べたように、中立の「二性」の打撃、ネガティヴ・ポジティヴ双方のニュアンスを伴わない、いわば素の打撃、男女両性を二つの性として端的に打ち出すだけの打撃のはずであった。ところが、デリダは第二の打撃を両性の打撃ではあっても、打ち出される両性をネガティヴな二項対立的葛藤の二つの性として打ち出す「悪しき」「不和」の打撃として規定しようとするのであった。この「悪しき」打撃が第二の打撃として位置づけられるとしたら、それはどのようにしてのことであろうか。デリダの次の二文面がその手掛かりを与える。

> 「〔「再度また」の一段の〕次の一段が、こう言ってよければ再度また〔あるいは「新たなこととして」de nouveau〕もちきたらすのは何なのだろうか。その一段は、「再度また wiederum」について何か新たなこと（再度また何か quelque chose de nouveau）を述べるだろう。その新たなことは、性の二性のうちでまた性の二性としてもう一度徴づけられる se marquer ことになるものを、つまり、性差のことを、徴づけ直す（述べ‐直す re-marquer）であろう。/ しがって、二回の打撃が、二回の型打ちが、二回の刻印が存在する。最初の打撃が型打ちすると、その刻印を残すというか、その刻印によってある「最初の」ゲシュレヒトを構成することになる。しかるに第二の打撃は悪しきもののように思われる。 Mais le deuxième coup paraît mauvais.（…）ハイデガーは呪い（Fluch）を挙げているが、それはおそらく、引用はされていないが、「夢のなかのセバスティアン（夢と錯乱）」中に読まれるトラークルの詩行「おお、呪われた一族（ゲシュレヒト）の」を暗々裏に参照したものであろう。族を型打つ打撃が呪いなのである。すなわち、「この族（ゲシュレヒト）は何によって打たれるのか、すなわち、何によって呪われるのであろうか。」」
>
> 「Zwietracht, 不和、決闘とは、それ自身は呪われていない二性 dualité や双重 duplicité（Zwiefalt, Zwiefache〔この二語のドイツ語の順番はママ〕）が戦争となることである。あとから到来した、第二の、呪われた**この**性差 *Cette* différence sexuelle survenue, seconde, maudite、それが族 l'espèce ないし性 le sexe に、つまりゲシュレヒトにもちきたらされた悪しき打撃である。」（Derrida, op. cit.,p.72, p.73）

第一の文面の最後は言うまでもなく、上に挙げた二つのハイデガーからの引用のうち、第二の引用の冒頭部分である。ハイデガーからの二つの引用は第一に第二が直接に連続したものであって、したがって、この部分は第一の引用中の「再度また」について「何か新たなこと」を（再度また）述べているというのが、（デリダの）第一の文面の最初の方で、持って回った言い方で意味されていることである。「再度また」の新たな再考によって、性差について、とりあえずは中立的な二性として徴づけられた se marquer 両性について、徴づけ直される、述べ直される re-marquer ことになるというのである。とするなら、「再度また」の徴づけ直し、すなわち、再編成の結果、どういうことになったというのだろうか。ここでのデリダの読解はかなり手の込んだもののように思われる。「再度また」の再編成とは二回ということの仕切り直しということであろう。それゆえ、これまで第一回、第二回の打撃とみなされてきたものは、その内容が代えられる可能性があるということである。

再編成の鍵を握るキーサードはむろん、「呪い」である。「呪い」はギリシア語の該当語を承けて、それ自身打撃の一種とされる。そして、「腐りゆくゲシュレヒトの呪いとは、この古きゲシュレヒトが両ゲシュレヒトの不和のうちへとバラバラにたたき auseinandergeschlagen 入れられていることに存する。」呪いは打撃であるが、この打撃はゲシュレヒトの何かしらすでに存立していることを前提に打ち込まれる打撃であるがゆえに、最初の打撃ではありえない。「しがって、〔最低〕二回の打撃が、二回の型打ちが、二回の刻印が存在する。」だとしたら、最初の、第一の、打撃とは何か。それはゲシュレヒトをそのようなものとしてまず成立させる、そういう打撃であるのでなくてはならない。そしてそういう打撃として、そこでは、成立するゲシュレヒトの種別、すなわち、さまざまな族とか、男女雌雄の両性とかの、区別はすべて取り払われてしかるべきだろう。「最初の打撃が型打ちすると、その刻印を残すというか、その刻印によってある「最初の」ゲシュレヒトを構成することになる」という文章の意味するところはこのことにほかならない。この場合「「最初の」ゲシュレヒト」とは、諸ゲシュレヒト（さまざま族だとか、性だとか）の集合としてゲシュレヒト、ゲシュレヒトのゲシュレヒトを指し示している。第一の打撃は、そういうあらゆるゲシュレヒトを、「最初の」ゲシュレヒトとして打ち出す打撃として位置づけ直される、徴づけ直される、というのである。そこでの諸ゲシュレヒトは、言わば真っさらの、いかなる色もいまだついていない、その意味で中性＝中立のゲシュレヒトである。男女両性のゲシュレヒトにしても同じことである。それは純粋な二性である。この二性が「不和」へとバラバラに打ち込まれる次第を問題にするのが、上掲第二の文面である。

そこでは、第一の打撃が「族ないし性」という言い方からも察せられるように、先には第一の打撃と第二の打撃に区分されていたものが、「ないし ou」によって――「元来」別々のものであるとの含意も残しながら――一緒くたにされ、それらがまとめて第一の打撃の内実として位置づけられていることがあらためて（「再度また」de nouveau）確認される。それに対し、両性の二項対立が「悪しき」打撃として「第二の」打撃としての身分を確立され、それが（ハイデガーの言にあったように）「野獣の…野生の…蜂起への狙い」となるのだとされる。それこそ、獣の剥き出しの情欲の露出であり跋扈である。いずれにせよ、先には打撃の二回性を導くための論拠と

されていた「再度また」に含意された差異の反復はものの見事に漂白されて、赤裸な獣性の色情という「悪しき」打撃に対比される、いずれにせよ中立的打撃であるとして、つまり、族の打撃も両性の打撃もその本質は変わらないとして、第一の打撃として一括りにされるのである。これらを一括りにすることによって打撃の回数はおのずと総計二回となる。とするなら逆に、この一括りは回数を二回に限定するための方策として採用されたのではないか、とも「邪推」されよう。どうしてデリダはここまで「二」に――それも一回目が中立で二回目が「悪しき」ものとして対比的反復である「二」に――固執するのか。（ここで、クレルが本来性の「散逸」と中立性のそれ（「分散」）とを一つにまとめていた旨の前節の指摘を想起しよう。デリダのいまの引用でも、「二性」と「双重（ふたえ）」という中性的打撃とポジティヴな打撃とがいずれも「それ自身は呪われていない」として一括されている。）これは解釈上相当の力技、無理無体なゴリ押しと評されても仕方ないような力技であろう。デリダはどうしてこのような強引な力技に走ったのであろうか。次の引用には、デリダのいわば本音が洩らされている。

> 「ここにいまや見られる〔二つの打撃に関する〕定式は、私がかつて〔第1ゲシュレヒト論で〕マールブルク大学での講義（1928）においてその前提をなすものとして示そうとした、テクスト上の力と謎を担っているもののように思われる。」（ibid., p.74）

そしてこの引用に続けて、ハイデガーの先の引用からの一文を続ける。「二性そのものが呪いなのではなく、不和がそうなのである。」つまり、デリダは1953年のトラークル論におけるハイデガーの思考の図式は、1928年の「論理学」講義と基本的に変わっていないと示唆しているのだ。ここで「二性」とは、「論理学」講義における「超越論的〔ないし中立的〕散逸」に相当し、それに対し「不和」はそれ以外の「経験的」「散逸」、すなわち非本来的「散逸」に当て嵌まると示唆しているのである。（ここで前者の「散逸」を「分散」に交換するなら、それはそのまま第1ゲシュレヒト論に対するクレルの論評の云うところにほかならず、逆に言うなら、クレルはデリダによる1928年講義と1953年のトラークル論との連結を見通していたからこそ、その主張を――第1ゲシュレヒト論の先を見越しながら（というのも、クレルは当時未刊の第三ゲシュレヒト論の内容を知悉していたのだから）その連結からの帰結を第1ゲシュレヒト論に遡及的に「投射」する形によって――第1ゲシュレヒト論をより首尾一貫したものへと補強する意図をもって、一定程度説得的に繰り出すことができたのであった。）いかにもデリダらしいともいえる、「論理学」の講義と詩作品の「在所究明」とから、同じ基本構造を四半世紀の時間的隔たりを乗り越えて導出するという、余人の及ばない解釈の冒険の試みである。だがこの試みははたして、ハイデガー解釈の許容範囲に収まると云える代物なのだろうか。

最後の引用に関して、デリダの本音が洩らされていると述べたが、それは文字通りのことである。つまり、超越論的ないし中立的散逸＝打撃と、非本来的ないし悪しき散逸＝打撃というこの二元論的定式がハイデガーの四半世紀以上に及ぶテクスト産出と運用の、ハイデガー自身にも気付かれずに隠された謎めいた原動力をなしているという本音である。逆に言うなら、この結論＝

定式を引き出すために、デリダはここでのトラークル＝ハイデガーの読解を展開しているのであって、中立性の第一回目と悪性の第二回目というこの定式こそが、したがってハイデガーの思想を――クレルの思惑はともかく、もはや超越論ではないにしろ――ある種の形而上学的二元論の枠組みに落とし込むことこそが、ハイデガー読解にあってデリダの「本音」として到達すべき目標点なのである。この定式が 1928 年であれ『存在と時間』の 1927 年であれ、1953 年のトラークル論であれ、倦まずたゆまず繰り返されているという「反復の論理」こそが、デリダの到達点として設定されているのだ。「この反復の形式ないし「論理」はトラークルを論じたこのテクストに読み取られるだけでない、それは、『存在と時間』以来現存在の諸構造、すなわち、頽落を、呼び声を、気遣いを分析し、「より始原的なもの」の、それほど始原的ではないもの、特にキリスト教に対する関係を規制するあらゆる箇所で読み取られるものなのである」（Derrida, *Psyché*, p.451）と「ハイデガーの手（ゲシュレヒトⅡ）」の最後で言われている通りである。ただ、この「反復の「論理」」なるものは、ハイデガーその人というよりは、デリダの手によって「創作」された、ないし少なくとも相当程度フレームアップされたものである可能性が高い。この創作の「論理」の具体相を『精神について』の検討によって開陳しよう。

「第二」や「悪しき」とは誰の言葉か

『精神について』でもデリダはハイデガーの同じトラークル論を、よほど集密度の高い論議を展開する仕方で取りあげつつ、一年の回転する経巡りの遍歴が「精神的 geistlich」であるとトラークルは述べていたとして、この遍歴について次のように続けている。

> 「この精神的遍歴は、「死の七つの歌」（O des Menschen verweste Gestalt〔おお人間の腐敗せる姿よ〕）が語る人間の形態の変質ないし腐敗（Verwesen）の解釈を可能とすることになろう。だがこの遍歴はまた、それもまさにいま述べたことのゆえに、第二の打撃（Schlag）の解釈も導いている。第二の打撃とは、ゲシュレヒトを、つまり人間種族と性差とを同時に型打ちする彼（か）の打撃のことである。この第二の打撃は差異の単衣なる二性（Zwiefache）を変容せしめて、そこに相剋的不和（Zwietracht）を刷り込む。（…）ゲシュレヒトは頽落している（verfallene）。この頽落はプラトニズム的でもなければキリスト教的でもない。それが頽落しているのは、正しき打撃（den rechten Schlag）を失ったからだ。かくしてゲシュレヒトは、この単衣なる差異の正しき打撃への途上に存していることになろう。それは、ある単衣なる双重の柔和（die Sanftmut einer einfältigen Zwiefalt）に向かう途上であって、そのことによって、二性（Zwiefache）を不和（Zwietracht）から解き放とうとするのである。途半ば、この正しき打撃に回帰する途の半ばにおいてこそ、魂はある違和なるもの（ein Fremdes）、ある異郷の人（Fremdling）に従いゆくのである。」（Derrida, *De l'esprit Heidegger et la question*, Galilée, 1987, pp. 140, 141. 港道隆訳『精神について　ハイデガーと問い』、人文書院、1990 年、p.144, 145。訳文改変）

ここで言われていることに対しては、相当の注意が必要である。例の「第二の打撃」について、それは「ゲシュレヒトを、つまり人間種族と性差とを同時に型打ちする」と述べられる。この規定は前節に見届けたところと微妙にして、決定的に異なっている。前節では、つまり、『精神について』より執筆時期がおおよそ二、三年遡る「ゲシュレヒトⅢ」では、第二の打撃は「あとから到来した、第二の、呪われた**この**性差、それが族 l'espèce ないし性 le sexe に、つまりゲシュレヒトにもちきたらされた悪しき打撃」とされていた。「族ないし ou 性」への打撃であったものが、ここでは、「人間種族 l'espèce humaine と性差 la différence sexuelle とを同時に à la fois 型打ちする」という。「ないし」が「同時に」に変換されている。「ないし」と「同時に」とで、ハイデガーの云うところにどちらがより近いかと言えば、言うまでもなく、前者である。例の「再度また wiederum」によって、「族」と「性」への打撃は分け隔てられていたのであり、したがって、それらを打撃するとしたら、それは二回の打撃として「族」と「性」とで区別されるべきものだったからである。ところが、その二回の打撃を一回のものへと集約し一括りにするというのが、前節で確認したデリダの戦法であった。「ないし」の「同時に」への変換は、明らかにこの戦法の一環である。A と B を「同時に」型打ちする方が、そうでないよりもよほど、それも、A「ないし」B をそれぞれ型打ちするなら、その場合よりははるかに、一回として数えられる可能性が高いだろう。そしてそれが第二回目の「悪しき」打撃として挙行されるとしたら、なによりその「同時」の打撃が可能であるために、打撃されるその相手が「同時的」存在として一気に狙いをつけられるのでなくてはならず、そしてそういう一気の狙いが可能な打撃相手であるためには、「同時性」が成立する存在として相手が「一」なる存在として打ち出されていなければならないだろう。この相手こそ、「族」であり「性」である以上、それらが「一」なるものとして「同時的」存在としてあらかじめ型打ちされていなければならない。この予めの「同時的」存在としての型打ちこそ、第一回目の打撃の果たした役割とされるのである。ところが、「ないし」の「同時に」への変換はハイデガーのテクストに歪みをもたらすものであった。デリダが歪みをもたらすこの変換を敢行したのはいかなる「狙い」なのだろうか。

歪みの恐れは、いま見届けた変換だけにとどまらない。本節最初の引用において、その前半部には「差異の単衣なる二性（Zwiefache）」という語句が見られた。「第二の打撃は差異の単衣なる二性（Zwiefache）を変容せしめて、そこに相剋的不和（Zwietracht）を刷り込む」のだ、と。そして後半部の引用には、「単衣なる差異の正しき打撃」とか「ある単衣なる双重の柔和（die Sanftmut einer einfältigen Zwiefalt）〔柔和＝柔らかな心映え（心意気）〕」という語句が見られる。「それ（ゲシュレヒト）が頽落しているのは、正しき打撃（den rechten Schlag）を失ったからだ。かくしてゲシュレヒトは、この単衣なる差異の正しき打撃への途上に存していることになろう。それは、ある単衣なる双重の柔和（die Sanftmut einer einfältigen Zwiefalt）に向かう途上であって、そのことによって、二性（Zwiefache）を不和（Zwietracht）から解き放とうとするのである」と。「単衣なる」は einfältig を訳したものだが、デリダはそれをフランス語としては simple と言い表している。ただし、ハイデガーは「単衣なる」を「双重」の形容として使用はしても、「二性」の形容として用いることは決してない。ところがデリダは、simple を「双重」「二性」の区別な

く散布している。これは何を意味するのだろうか。デリダのいかなる「意図」が、先ほど来の語法を援用するなら、いかなる戦法がそこには垣間見えることになるだろうか。

結論を述べるなら、それは、「二性」と「双重」の区別の撤廃であり、両者の融合ないし無差別化という戦法にほかならない。だとしたら、どうしてデリダはそのような戦法を採用するのだろうか。両者が融合し同一化するとしたら、それはどのような融合＝同一化となるのだろうか。デリダの記すところから判断するなら、それは「二性」が「双重」を取り込み併呑するという形の融合となるだろう。「二性」主体ないし優位の融合であって、「二性」の性格が保持され、それをベースにそこに「双重」の特質も取り入れられるという形である。「二性」とはいかなるものであったか。それはなにより、中性・中立の両性を謂うのであった。したがって、それはいまだ二項対立的「不和」の関係をなさない、それ「以前」の両性関係を意味していた。

この「二性」に「双重」の特質も取り入れられそこに融合するとしたら、どういうことになるのか。いうまでもない、「双重」もまた「不和」「以前」に位置づけられることになる。そういうものとして「双重」は「二性」と等しいものとみなされ、「二性」＝「双重」が性の始原のある種の桃源郷的状態として特定されることになるだろう。したがって、「二性」＝「双重」は、「不和」に単に先立つ状態であるばかりか、いまが「不和」であるとして、その「不和」を克服して帰還すべき理想であり故郷であることになろう。ゲシュレヒトは、「ある単衣なる双重の柔和（die Sanftmut einer einfältigen Zwiefalt）に向かう途上であって、そのことによって、二性（Zwiefache）を不和（Zwietracht）から解き放とうとする」という文言は、デリダのそうしたハイデガー解釈の「狙い」に如実に即応するものであろう。

それはまた、「ゲシュレヒトⅢ」の段階でも、「「Zwietracht, 不和、決闘とは、それ自身は呪われていない二性 dualité や双重 duplicité（Zwiefalt, Zwiefache）が戦争となることである」（p.73）という文言によって暗示的に予告されていたことであった。「それ自身は呪われていない二性 dualité や双重 duplicité（Zwiefalt, Zwiefache）」において、「二性」に相当するドイツ語は Zwiefache であり、「双重」のそれは Zwiefalt であるはずなのに、ドイツ語の順番が逆転しているのは意図的なのか否かははっきりしないが、もし意図的であるとしたら、「二性」と「双重」の意味上の区別をわざと混同して混乱させ、もって、それらの相互の区別の重要性を暈しているということなのかもしれない。そうだとしても、「ゲシュレヒトⅢ」に較べて、『精神について』の方が「二性」と「双重」の融合の程度がかなり増していることはたしかであろう。（ここで、第1節でクレルが本来性の「散逸」と中立性のそれとを同一視していたことを再度想起しよう。彼は中立的「二性」と本来的「双重」との、デリダによる融合を見越していたとしても、何ら不思議ないのだ。）そして、融合ないし差異の暈しのこの増大が、いましがた見た、「族」と「性」の一括化とも即応していることは、言うまでもない。それにしても、こうしたこと一切で、デリダは何を「狙い」とし、いかなる戦法を繰り広げようとしているのか。それは、打撃の二回性の確立、それも第二回目が「悪しき」打撃である、二回の打撃の、確固たるものであることの確定という狙いであり戦法である。だが、この戦法は最後には、テクスト読解の戦法として、その護るべき圏域外に飛び出しかねない危うい地点にまで突き進む。

四時間近くに及んだという長丁場となった一気呵成の講演『精神について』もついに、最終第10章も半ばごろとなったところでデリダは次のような言葉を発している。

> 「これらのもの〔打撃、型打ち、刻印〕から出発してハイデガーは、彼の言語（ラング）で、ゲシュレヒトを、その正しい型打ちにおいて、次にはそれを「腐りゆくゲシュレヒト」へと放り出して腐敗させる悪しき打撃において解釈している。後者の二性は不和（Zwietracht）への定めをもっている。人間のゲシュレヒトを型打ちする打撃、それには正しいのもあれば悪しきもの、第二のもの、災い、呪いもある（これらはハイデガーの語である）が、それらは精神の打撃である。」（Derrida, ibid., P.174-175. 邦訳 p.174.　訳文一部改変）

「精神の打撃」という新たな論点を除けば、取り立てて問題とするにあたらない一節のように思われようか。しかし、「悪しき le mauvais」打撃、「第二の le second」打撃とは果たしてハイデガーの語であったろうか。たしかにこれまでの引用からも確認されるように、「打撃」はむろん、「正しい打撃」も「呪い」もハイデガーの語であるのは間違いないし、「傷」の意で解されることの多い「災い la plaie」とはドイツ語 Fluch（呪い）の仏訳として採用されている（Derrida, *Geschlecht Ⅲ* , p.73）というのだから、少し問題含みだとしても、これもハイデガーの語に数え入れても、許容されないでもあるまい。しかるに、「悪しき」も「第二の」も決してハイデガーの語ではない。「第二の」については、「再度また」を援用する道が閉ざされてしまったがゆえに、尚更のことである。「悪しき」にしても、「呪い」との関連で解釈を積み重ねた末にようやく、デリダが繰り出すことを正当化した（つもりの）形容なのであって、それをもってして、「ハイデガーの語」と断言するのは、厚顔と言わないまでも、相当の無理を断行することにほかなるまい。実際、「悪しき」打撃については、デリダは「第二の打撃は悪しきもののように思われる」とかなり控えめの言い方によって最初第3ゲシュレヒト論で導入していた（Ibid., p.72）。にもかかわらず、その二年後には「ハイデガーの語」としてハイデガーに帰責するかのような言動を見せるというのは、「思われる」はどこに飛んだのだろうと思わせる。

「第二の」打撃も「悪しき」打撃もハイデガーの語ではない。それはむしろ、デリダの手練手管を尽くした読解の妙術の限りを尽くした解釈の結果としてようやく割り出されてきた結果としての、デリダの語なのである。みずからの語を解釈「対象」の語として「投射」する（この投射は、前節に見たクレルの「投射」と基本的に同じ性格のものであろう）とはどういうことなのか。いうまでもない。みずからの語を、解釈対象によって権威づけることであり、それはむしろ、解釈の労苦を無化する、少なくとも糊塗しようとする営為であり、解釈の安逸死とも言えるような仕業である。それもこれも、「第二の」「悪しき」打撃をハイデガーにおいて自明化しようとの戦法のなせる技である。「第二の」「悪しき」業、ひるがえって、「第一の」「良き」ないし少なくとも「中立の」業（その意味で、「第二」が「第一」に先行するのであり、後者は現状の確定としての「第二」にもとづいて「想像」され創出される。クレルもまた、第一と第二のこの「アナクロニー」はデリダのいう「代補 supplement の論理」にほかならないという。Krell, op.cit., p.166）、

この第一と第二の業という大枠に、ハイデガーの思想は突き詰めれば、囚われている。そのときハイデガー思想はものの見事な形而上学の典型としてその本質的姿を現出するだろう。

「第二の」「悪しき」打撃のハイデガーにおける自明化とは、当の打撃を既成事実化する試みである。なぜデリダはこの試みに走ったのだろうか、走らざるを得なかったのであろうか。既成事実化されるのはなによりも、「ある種の二の思想、二性としての差異と、さまざまの二性間の戯れ、少なくとも二度の二の思想」（*Geschlecht Ⅲ* , p.142-143）である。それはなにもすぐさま、形而上学的二元論に還元されるわけではあるまい。ハイデガーの思想が端的に形而上学だとはデリダにしてもみなすことはない。むしろデリダがこだわるのは、形而上学に対しなにかしら距離を取っているはずの、そしてその距離は多くの場合目に見えて示されているハイデガーであるにしても、それでも、その思想の随処で形而上学の残滓が噴き出さずにはおかないという点に対してなのである。現存在（人間）と動物との間に本質的な区別の一線を――何の躊躇いもないかのように――引くことなどにもそのことは明らかだというわけである。

脱形而上学を標榜するハイデガーの思想の奥深くに巣食う形而上学的発想――その典型例として「第二の」「悪しき」打撃が構想されていることは疑いないだろう。他方、形而上学の元凶というか、本家本元であるプラトンには、その形而上学に収斂されない要因が突き止められるともデリダは考える。「プラトンのテクストを、同じ〔反プラトニズム的〕再 - 解釈の挙措に掛けて、「プラトニズム」から引き離す、同テクストの読解」（ibid.,p.63）も可能だというのである。実際デリダはこうした読解を数年後プラトンの「コーラー」に関して実践して見せたのであった（Derrida, *Khôra*, Galilée, 1993）。形而上学のど真ん中の、没（ないし未）形而上学性とでもいうべきか。それに対して、形而上学の「超克 Überwindung」ないし「耐忍 Verwindung」を掲げ基本的に脱形而上学の方向性を模索する姿勢を鮮明にしているハイデガー――その点で、デリダも共鳴を隠そうとしないハイデガー――については、デリダはむしろ、そこにしぶとく染みついている形而上学的要素を丹念に拾い上げようとする。ひとによっては、デリダのバランス感覚を言挙げするかもしれない。それは何も否定するに及ばない。

形而上学者プラトンに没（ないし未）形而上学的素因が認められ、脱形而上学者ハイデガーに残り続ける形而上学の根、そしてそれらを掘り起こし執拗に洗い出そうとする――大筋ではハイデガーの傾向を受け継いでいる――デリダ――形而上学としての西洋思想の歴史は、かくも一筋縄ではゆかない。そしてデリダがハイデガーに対し、何か許すべからざる難点として批判することがあるとしたら、それはまさに、この一筋縄でゆかなさへの配慮の不足ではなかったろうか。「トラークルの原詩のためにそれを取り集める一つの場所を要求するのと同じように、ハイデガーは、形而上学そのもの、キリスト教そのもののための、ユニークで一義的なただ一つの場所があるということを前提せざるを得ない。」（Derrida, La main de Heidegger, in: *Psyché*,p.451）形而上学＝キリスト教の本質の一様化である。それはまた、脱形而上学としてのトラークルの原詩の、非キリスト教化という形の一様化でもあるだろう。そういう一様化がハイデガーに潜んでいる、いや、顕在化していることは、おおかた認められよう。

ハイデガーにおけるこの一様化の顕在化のための戦法として機能しているのが、「第二の」「悪

しき」打撃の既成事実化である。しかしそれは勇み足すれすれ、許容範囲を逸脱しかけた戦法であった。「二」の枠組みにハイデガー思想をはめ込もうとするその戦法はいわば、ハイデガー思想の――形而上学の一様化の思想としての――均質化の試みである。ところがデリダは他方で、ハイデガーがそうした均質化に簡単に応じてくれない思想家であることもよくよく承知していた。「ハイデガーを「批判」するとしても、その場合批判は彼のテクストの他の箇所によってなしうることを思い起こさずには、決してできない。彼のテクストは均質 homogène ではありえないのであって、それは少なくとも二つの手で書かれているのだ。」（Ibid., p.447）

すると、どうなるのだろうか。デリダは、ハイデガーのテクスト＝思想が均質化しえないことを弁えたうえで、その均質化を図ったということだろうか。しかしそれは、形而上学を一枚岩に仕立て一様化するハイデガーの姿勢と何か異なったところがあるだろうか。形而上学を一様化するハイデガーが形而上学的であるとしたなら、そのハイデガーを均質化するデリダもまた形而上学化しているのであろうか。というのも、「第二の」「悪しき」打撃の、つまりは、「二」の、既成事実化を図った――それも、「ハイデガーのもっとも豊かなテクストの一つ、精妙で、重層決定され、かつてなく翻訳不能なテクストであり、むろんもっとも問題含みの一テクストでもある」（Derrida, *De l'esprit*, p.137）と彼自身評する「トラークルの原詩の在所究明」に関してそう図った――デリダであるが、この既成事実化は思想的に何も必然だとは思われないからである。実際ハイデガー本人は、「中立的二性」と「本来的な」「単衣なる双重」とを同一視したうえで、そこからの頽落として、二項対立的両性の「不和」が発生したと述べているわけでは決してない。トラークルの原詩の在所究明をするハイデガーにとって問題の要をなすのは、「不和」からいかに「単衣なる双重」へ、その「柔和＝柔らかな心映え」に移行していくかであって、そこでは「第二の」「悪しき」打撃が表立って登場しなければならないいわれは何ら存しないのである。どうして「二性」＝「双重」から「不和」に至ったのかではなく、むしろ、「不和」の現況からの「双重」への解放こそが、トラークル＝ハイデガーの問題意識の前面を占めている。その限り、ハイデガーが「二」の枠に押し込まれなければならない必然性はそこにはないと言わざるを得ない。ハイデガーに形而上学の嫌疑が皆無だなどと云おうとしているのではない。少なくとも、このトラークル論のこの点に関してこの嫌疑をかけるのは、行き過ぎの誹りが免れないのではないか、と釘を刺したいだけである。[4]

---

[4] デリダが『精神について』でハイデガーの語だとした「第二の」の原語は second（p.175）であって、deuxième ではない。ところが同書のそれ以前では（p.140）、「第二の打撃」として後者の語が採用されている。（もう一つの語である「悪しき」は mauvais で一貫している。）フランス語には二つの「第二」があり、それらに区別があるとしたら、second の方がことやモノが二つしかない場合に使用される傾向があるという。デリダがいま second を用いる際には、この二つだけで打ち切りというニュアンスが何かしら響かせられているとしたら、どうであろうか。その場合には当然、打撃は（中立的）二性＝（単衣なる）双重と不和との二つへ限定されることがより強調されるわけで、second がハイデガーの語として打ち出されることで形而上学的二元性がいっそう露骨に狙い定められていることになろう。第 3 ゲシュレヒト論では second（p. 38, 73, 75）と deuxième（p.72, 74）はごく近くに混在してもおり、使い分けの意図は感じられない。他方クレルはと言えば、デリダの二回目の悪しき打撃という解釈をそのまま踏襲している。「二回目の打撃 the second *Schlag* が、ハイデガーのテクストの示唆している suggest ように、平穏な双重を無規律な個体化と孤立へと追いやる drive としたら、デリダの方は、その個体化をいかにして呪いとして理解すべきなのか、と問う。」（Krell, op. cit., p.167）ただし、ここで「示唆」という含みのある語が採用されていることには、いちおう留意すべきであろう。

おそらく、ハイデガーに劣らず、デリダもまた、違った形で、「二」に取り憑かれていたのかもしれない、西洋思想史に絶えず出没していた、「二」の魔に。

デリダがハイデガーのゲシュレヒトがらみのテクストにこだわったのは単にハイデガーの形而上学性を云々するためではない。そこには、ハイデガーでは直接表面化することのない、性の「夢想」が重要な役目を果たしていた。それは、思いもかけないような多種多様な形ときめの細かいグラデーションに彩られた――両性の二項対立「以前の」――「性的関係」の新たな姿への夢想である。クレルは、そうしたデリダの性的「夢想」――それはある意味では、ハイデガーも共有する「夢想 dream」なのだと、クレルは補足する（Krell, op. cit., p.229）――の表明として、対話的文章から、最後の 1 頁弱を引いている。デリダ＝クレルからの引用箇所の指示でもって本稿を閉じよう：Jacques Derrida, *Points de Suspension Entretiens*, Galilée, 1992, pp.114 l.26-115 l.20；Krell, op. cit., pp.199-200。

（すとうのりひで　現代思想文化学・教授）

Träume von "Zwei":
Am Rand des den Heidegger über Trakl de-konstruierenden Derrida und des den Derrida re-konstruierenden Krell

Norihide Suto

Jacques Derrida versucht in der ersten der fünf seriellen Abhandlungen über Heideggers „Geschlecht" in 80er Jahre des zwanzigsten Jahrhunderts, Probleme der Ansicht Heideggers von der geschlechtlichen Differenz durch Applikation des Begriifs der „transzendentalen Zerstreuung" aufzuzeigen, womit er auch darauf zielt, neue Möglichkeiten der vielfältigen geschlechtlichen Verhältnisse zu untersuchen. Und dabei trägt David F. Krell in seinem Buch über Derridas „Geschlecht"-Abhandlungen: *Phantoms of the Other* (2015) zur Ausformung der Interpretation Derridas als einer konsistenteren Transzendentalisierung der Heideggerschen Philosophie bei. Damit aber haben Derrida und Krell einen philosophisch schweren inneren Widerspruch in sich eingeschmuggelt, weil die gedankliche Transzendentalisierung und die Findung der neuen geschlechtlichen Verhältinisse miteinander in sich ausschließenden Relationen stehen. Darum will Derrida in seinen späteren „Geshlecht"-Abhandlungen über Heideggers Erörterung vom „Gedicht" Trakls nicht mehr versuchen, Heideggers Philosophie zu transzendentalisieren, sondern in den Rahmen der zwar nicht-tranzsendentalen, doch metaphysischen Dualismus hineinzupressen, wogegen Krell die Transzendentalisierung vielleicht bis zum Ende festhält und damit riskiert, an Derridas wahrem philosophischem „Trachten" nach „Geschlecht" vorbeizutreffen. Andererseits ist Derrida endlich am Ende seiner wichtigen Studie über Heideggers „Gesit" : *De l'esprit* (1987) zur Erstärkung seiner Argumentation sogar dazu gekommen, „second (zweit)" und „mauvais (böse)", die Heidegger im betreffenden Kontext niemals verwendet hat, als Heideggers Worte zu „erfinden". Aber gerade darin, d. h. in der Homogenisierung der Heideggerschen Philisophie im Ganzen, ist Derrida gleich mit Heidegger, mit der Gleichmachung der Metaphysik durch Heidegger.

「キーワード」
ゲシュレヒト、シュラーク（打撃）、「第二」、「悪しき」、形而上学、一様化